

「国分寺はなぜスローライフなまちといわれるのか」

2024年10月6日（日）14:00～16:00

国分寺市立光公民館集会ホール

笹川 克也（東京経済大学 地域連携センター）

東京経済大学 地域連携センターの笹川と申します。

本日はこのような集まりにご参加いただきありがとうございます。

よろしくお願いいたします。

普段は東経大で地域連携の仕事をしています。

2007年に広報の仕事をしていたときに「**国分寺タウンマップ**」という、国分寺のまちを様々な角度から紹介するガイドブックをつくりました。

しかし、これをつくったことによって、逆に、知らないことややり残したことの大きさが見えてしまったため、国分寺のカウンターカルチャーやサブカルチャーの歴史について調べ始めることになりました。

途中中断した時期もありましたが、3年ほど前に現在の職場である地域連携センター勤務になり、国分寺のまちの文化などについて文章を書いたりすることによる発信を再開しました。

3年前はコロナ禍でイベントなどが中止になっていた状況だったので、文章以外の方法でも発信できないかと考え、ラジオ番組をつくることを思いつき「**国分寺レイディオ**」

https://www.tku.ac.jp/renkei/area-center/kokubunji_radio.html

というポッドキャスト番組を始めました。



この番組の第1シーズン「**国分寺1976**」を国分寺市立図書館スタッフの方に聴いていただいたことがご縁になり、本日、みなさまの前で話をさせていただくことになった次第です。

本日は2時間ほど時間をいただいておりますので、まず1時間半ほどお話しをさせていただき、短い休憩をはさみ、残りの時間でご質問にお答えしたいと考えております。

お手元には3種類の資料をご用意しています。

一つ目は、スクリーンに投影するパワーポイントのハンドアウト資料です。

興味を持っていただいた方がご自身で調べていただくための資料となるようかなり文字を多めに詰め込んであります。

二つ目は、話の中で聴いていただく予定の曲のプレイリストです。

時代の雰囲気などを知っていただくために、すべては無理かもしれませんができるだけかけてゆきたいと思います。

三つめは、お土産としてつくりましたブックガイドです。

国分寺市立図書館で所蔵しているものを多めに紹介していますので、ご興味を持たれた方はぜひ国分寺市立図書館でお借りください。

本日は盛りだくさんの内容なので時間的には厳しく、予定した内容をすべてお話しすることができないかもしれませんが、どうぞ最後までお楽しみくださいますようよろしく願いいたします。

大学のまち

さて、これから国分寺のまちの現在までの60年ほどの文化史といったことをお話ししてゆくのですが、その土台としてあるのは、国分寺は大学のまちだということです。

戦前は関東大震災による焼失（一橋大学、津田塾大学）、戦後は空襲による焼失（東京経済大学）で都心部の校舎を失った大学などが次々と国分寺駅周辺に移転してきたことによって、もともとベッドタウンだった国分寺のまちは、文化的な準インフラとでもいうべき、古書店、映画館、名曲喫茶などが充実している大学まちの姿になっていったのです。

毎年入れ替わる大学の学生や教職員がほかのまちとは比較にならないほど多くいることによって、様々なかたちでの人と人との交流がなされてきたのではないかと思います。

大学生が新しいものに強い興味を示す、あるいは大学生がまちに新しい何かを持ち込むといったことによって、何かが大きく変わる、あるいは生まれる、といったこともあったのではないのでしょうか。

そのような意味では、個人的な印象としてですが、国分寺独特の文化が形成されてゆくなかで武蔵野美術大学の学生や卒業生が重要な役割を担っていたのではないかと考えていますが、これはのちほど説明できればと思います。

ちなみに、「**旅する巨人**」として知られる民俗学者の**宮本常一**さんが、武蔵野美術大学で教えられることになり国分寺駅南口から徒歩20分のところ（府中市新町）に住み始めたのはちょうど60年前の1964年です。

宮本さんは国分寺に転居することを決めたときのことを『私の日本地図⑩ 武蔵野・青梅』に書かれていますので、その部分を読んでみます。

「話をきめて、娘をつれてその家を見せにいったら娘が『こんなに遠いところなの』と涙をおとした。国分寺の駅から私の家まで近道を通ると途中でほとんど家はなかった」

60年前の国分寺駅南口の様子がよくわかります。

漫画とアニメ

大学のまちである国分寺に、現在につながる最初と思われる大きな文化的変化が起こったのは1950年代後半でした。

それは、1958年に大阪から若手の漫画家たち3人が上京し、国分寺駅北口から徒歩2分ほどのところにあったアパート「**ことぶき荘**」に住んだことです。

大阪から上京することになった経緯は**辰巳ヨシヒロ**さんの『**劇画漂流**』と『**劇画暮らし**』に描かれています。

この数年前、先に東京に出てきていた、辰巳さんが師と仰ぐ**手塚治虫**さんの姿も、東京での挑戦を後押ししたのではないのでしょうか。

国分寺のまちで辰巳さんを中心に「**劇画工房**」という漫画家グループが結成され、子ども向けの「**漫画**」ではなく、大人を対象とする「**劇画**」という造語をつくり出し、新たな表現を模索していったのです。

それまでの「**漫画**」と異なるところは、映画的なカットバックの手法を画面に使う、登場人物の内面描写を表情のアップやコマ割りで示す、といったものでした。

辰巳さんたちのグループが自分たちの作品を「**劇画**」と名乗ったことで、この名称は徐々に定着してゆきます。

辰巳さんたちは、そのころ国分寺にできた「**名曲喫茶 でんえん**」や「**バセロン**」といった喫茶店で長い時間議論していたそうですが、住宅事情の悪かった若者たちにとって喫茶店という場所はとても重要でした。

辰巳さんは1年半ほどで国分寺のまちを離れてゆきましたが、**さいとうたかお**さんは国分寺に残り、分業（プロダクション）方式で劇画を制作する「**さいとうプロダクション**」を設立します（1967年に中野に移転します）。

「**さいとうプロ**」に所属したクリエイターたちは、『**いなっぺ大将**』や『**巨人の星**』で知られる**川崎のぼる**さんなど、のちに独立して有名になってゆく人が多かったようです。

「**さいとうプロ**」の作品として最も有名なのは、1968年に始まり、さいとうさんが亡くなった現在でも続く『**ゴルゴ13**』でしょう。

国分寺の「ことぶき荘」に大阪からやってきた漫画家たちが住んでいた同じ頃、豊島区南長崎の「トキワ荘」というアパートには藤子不二雄さんや石ノ森章太郎さんといった後のレジェンドたちが住んでいました。

手塚治虫さんの1954年の入居から始まる、「トキワ荘」に住んだ漫画家たちのことは、藤子不二雄[Ⓐ]さんが『まんが道』に描いたことで、「梁山泊」伝説となりましたが、このころの国分寺「ことぶき荘」はもう一つの漫画（「劇画」）家たちの「梁山泊」だったといえるのかもしれませんが。

ちなみに、辰巳ヨシヒロさんは国分寺時代に知り合った北口の「バセロン」という喫茶店のスタッフの女性と結婚しています。

辰巳さんの作品はフランスの書店では、『NARUTO-ナルト-』や『ONE PIECE』などが置かれているマンガのコーナーではなく、手塚治虫さんや萩尾望都さんなどと一緒にアートのコーナーに置かれているそうです。

辰巳ヨシヒロさんやさいとうたかおさんたちの大阪グループから少し遅れて、1962年に吉田竜夫さんたちが、よりよい環境を求めて小岩から国分寺に移り住んだことは、国分寺のまちにとってもタツノコプロにとっても大きなことでした。

吉田竜夫さんは、京都から上京してきた二人の弟さん（健二さん、豊治さん）たちといっしょにプロダクション方式の漫画制作を始めます。

「さいとうプロ」とほぼ同時の先駆的な試みが国分寺で始まったのです。

タツノコプロはすぐにアニメ制作に取り掛かります。

手塚治虫さんの「虫プロ」による『鉄腕アトム』（1963年）にわずかに遅れますが、タツノコプロはこのあとアニメで成功し誰もが知る会社となります。

しかし、吉田竜夫さんは1977年に45歳という若さで亡くなります。

この頃に入社したのが押井守さんでした。

押井さんのあまりにも有名なエピソードですが、東京学芸大学を卒業してラジオ制作会社に就職しますが、給与の未払いが起こり退社します。

やはり中学校の技術家庭の先生になろうと考え、応募書類を郵送してもらおうと友達に預けましたが、その友達は出すのを忘れて先生にはなれませんでした。

既に学生結婚をしていた押井さんは下を向きながら一橋学園の駅の近くを歩いているとタツノコプロの求人募集広告が電柱に貼ってあるのを見つけて応募します。

『ヤッターマン』シリーズから始まったタツノコプロでの押井さんの活躍は目覚ましいものでした。

その後、**タツノコプロ**から独立するかたちで設立された「**プロダクション I.G.**」制作の『**攻殻機動隊 GHOST IN THE SHELL**』の成功によって、押井さんは世界的な映画監督となります。東経大でも客員教授として教えられていたこともあります。

ちなみに、**クエンティン・タランティーノ**監督が『**キル・ビル**』のアニメ・パートを「**プロダクション I.G.**」に依頼するために、アポなしで国分寺に来たという出来事がありました。「**プロダクション I.G.**」ではこの人は本当に**クエンティン・タランティーノ**監督なのだろうかと言いつつ、依頼は受けたそうです。

「**プロダクション I.G.**」制作の『**キル・ビル**』のアニメ・パートは世界的にも評価されることとなります。

世界最先端のアニメがこのころの国分寺で制作されていたのです。

しかし、「**プロダクション I.G.**」は2010年に、「**タツノコプロ**」は2013年に国分寺から去ってしまいました（両社とも三鷹駅北口に移転しました）。

残念ながら、1958年から始まった漫画とアニメのまち国分寺はすでに歴史的には過去の出来事となってしまったのです。

「ヒッピー」とは何か？

ここから60年代後半に現れた「**ヒッピー**」の話になります。

国分寺の「**ヒッピー**」たちの話をするまえに、アメリカの「**ヒッピー**」とはどのような人々だったのかを先に説明させてください。

「**ヒッピー**」はアメリカのメディアが名付けた名前ですが、当時も現在もかなり誤解されています。

「**ヒッピー**」とは、突然1960年代半ばにサンフランシスコの**ヘイト・アシュベリー地区**に現れたのではないのです。

50年代に「**ビートニク**」と呼ばれた、個を押しつぶそうとする社会の抑圧から逃げようとした若者たちがそのルーツなのです。

「**ビートニク**」たちは、社会からドロップアウトをして逃げるとともに、それを詩や小説であらわし、それが高い評価を受けたために、当時の若者たちに影響を与えることになりました。

「**ビートニク**」たちの代表作は、**ジャック・ケルアック**の小説『**オン・ザ・ロード（路上）**』や**アレン・ギンズバーグ**の詩『**ハウル（吠える）**』などです。

『**オン・ザ・ロード**』は**ボブ・ディラン**や**ジャニス・ジョプリン**といったロック・ミュージシャンたちに大きな影響を与えました。

60年代のアメリカでは、**公民権運動**や**ベトナム反戦運動**といった激しい社会運動が巻き起こっていました。

60年代前半の**公民権運動**（1963年の**ワシントン大行進**で**マーティン・ルーサー・キング牧師**が「**アイ・ハブ・ア・ドリーム（私には夢がある）**」と演説したことは日本の教科書にも載っています。1964年の**公民権法**成立以前はアフリカ系アメリカ人の選挙権など公民権は非常に制限されたものだったのです）に続き、60年代後半の**ベトナム反戦運動**は激しさを増してゆきます。

このころのアメリカは徴兵制ですから、男性は18歳6か月になると徴兵され、かなりの確率でベトナムに送られることになります。

無益な殺りくに加担することを拒否する若者たちが、大学生を中心に徴兵拒否を含む大規模な反戦運動を全米で巻き起こしていったのです。

このような政治的プロテストの中で、50年代の「**ビートニク**」のように逃げるだけではなく、暴力を伴うプロテストでもない、非暴力でオルタナティブな道を探ろうとする若者たちが、サンフランシスコの**ヘイト・アシュベリー地区**に現れ始めます。

この若者たちは「**ラブ・アンド・ピース**」という言葉で知られるように、非暴力による文化革命を実践するための「**コミュニオン**」をつくろうとしました。

サンフランシスコの「**ヒッピー**」たちの思想は、アメリカだけでなく先進国を中心に世界中にすぐに広まり、影響を受けた若者たちが「**ヒッピー**」の理想を実践することになります。

ヒッピー文化がのちの時代にもたらしたものは、エコロジー、ロック音楽、パーソナル・コンピュータなどです。

ちなみに、コンピュータというと60年代はまだIBMの巨大なマシンの時代でした。

アップル・コンピュータ創設者の**スティーブ・ジョブズ**は少し遅れてきた「**ヒッピー**」です。

1976年に仲間の**スティーブ・ウォズニアク**らとともに「**アップル・コンピュータ**」を設立しましたが、その時期にすでに彼らの思い描く未来のコンピュータのかたちは個人が使うA4サイズぐらいの薄い黒い板上のものだったのです。

2005年6月12日、スタンフォード大学の卒業式で彼が言った「**Stay hungry, stay foolish.**」という有名な言葉は、ヒッピー・コミュニオンには必ず置いてあったヒッピーたちの愛読書『**ホール・アース・カタログ（全地球カタログ）**』の裏表紙に書かれていた言葉の引用です。

日本で最初に「**ヒッピー**」たちが出現したのは1967年ごろの新宿です。

サンフランシスコの「ヒッピー」たちをただ模倣する若者たちが多かったようですが、その中にはサンフランシスコの「ヒッピー」たちと同じように、50年代の「ビートニク」の影響を強く受けたグループもいました。

50年代から「新宿ビートニク」と呼ばれていたグループであり、彼らは、60年代後半の新宿のまちの熱気のなかで、サンフランシスコの若者たちの動きを知り、新たな行動を起こすのです。

60年代後半の新宿のまちは、演劇、映画といった新しいアンダーグラウンドな文化（アングラ文化）の熱気にあふれていました。

現在でも『書を捨てよ、町に出よう』などの著作が読まれ続けている寺山修司さんが劇団「天井桟敷」を旗揚げ、今年（2024年）亡くなった唐十郎さんが「紅テント」を旗揚げするといったことが次々に起こっていたのです。

新宿のまちを象徴する存在だったジャズ喫茶では、当時20歳前後だった村上春樹さん、北野武さんといった若者たちがアルバイトをしていました。

政治的にも、**大学紛争**や**ベトナム反戦活動**といったものが激化していたのですが、1968年の「新宿騒乱」（NHK ウェブサイトを参照してください。この暴動の結果、新宿駅が焼き討ちされて144人が騒乱罪で逮捕されています）や1969年の「新宿フォークゲリラ掃討」（1969年にベトナム反戦活動のために新宿西口広場で反戦フォークソングを歌っていた若者たちの数が数千人規模となり機動隊が出動して掃討しています）によって新宿のまちの熱気が冷めてゆき、その熱は中央線沿線に散らばってゆくのです。

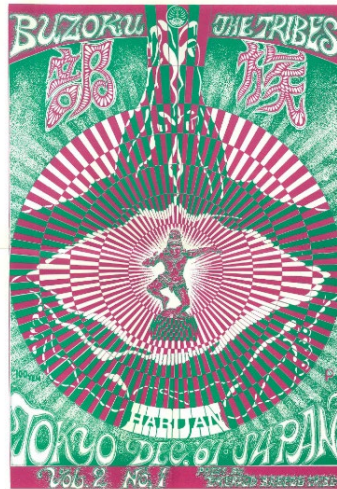
ちなみに、大学紛争の中心だった日大は当時34億円もの使途不明金が発覚したことで学生たちが怒り行動を起こし両国国技館に集まり大学当局に改善を認めさせるところまでいったのですが、なんと、当時の**佐藤栄作**首相がその約束を覆し幕引きとなっています。

「部族」と名乗ったヒッピーたち

ようやくここから国分寺にいたヒッピー「部族」の話になります。

左側は国分寺の「部族」の写真です。

右側は「部族」が自分たちの考えを知ってもらうために1967年に発行した「部族新聞」です。（両図版とも『増補改訂版 アイ・アム・ヒッピー』山田塊也 2013年 森と出版 から引用）



「部族新聞」のサイケデリックな画はサンフランシスコの「オラクル」というアンダーグラウンド・ペーパーの影響を受けたものですが、当時としてはかなりショッキングなものだったと思います。

描いたのは「部族」のメンバーである山田塊也さんです。

山田塊也さん（通称「ポン」）は画家ですが文章もうまく、日本のヒッピー・ムーブメントの歴史について細部まで上手にまとめた本『アイ・アム・ヒッピー』を1991年に発表しています。

50年代の「逃げる」「ビートニク」に対して、その影響を受けた60年代の「ヒッピー」は「作り出す」ことを試みます。

日本の「部族」もそうでした。

「部族」は自分たちの考えをまとめて「部族新聞」というかたちで発表してから、自分たちの理想を実現するための「コミュン」をつくる試みを始めます。

国家から家庭まである様々な組織は、組織であるがゆえに原理的に「個」を抑圧する。それが「部族」の認識でした。

ネイティブ・アメリカンの部族にならい、原始共同体的なコミュンをつくり理想を実現することが、メインストリームに対するカウンターでありオルタナティブな道であると感じたのがアメリカのヒッピーたちであり、日本の「部族」だったのです。

「部族宣言」

ぼくらは宣言しよう。この国家社会という殻の内にぼくらは、いま一つの、国家とは全く異なった相を支えとした社会を形作りつつある、と。

統治する、或いは統治されるいかなる個人も機関もない、いや“統治”という言葉すら何の用もなさない社会、土から生まれ、土の上に何を建てるわけでもなく、ただ土と共に在り、土に帰ってゆく社会、魂の呼吸そのものである愛と自由と智恵による一人一人の結びつきが支えている社会——ぼくらは部族社会と呼ぶ。

アメリカ、ヨーロッパ、日本、その他の国々の若い世代によって、何百万人という若い世代の参加によって、静かにあくまでも静かに、しかし確実に多くの部族社会が形作られつつある。

都会に或いは山の中に農村に海辺に島に。やがて、少なくともここ数十年内に、全世界にわたる部族連合も結成され、ぼくらは国家の消え去るべき運命を見守るだろう。ぼくらは今一つの道、人類が死に至るべき道ではなく、生き残るべき道を作りつつあるのだ。（後略）

『増補改訂版 アイ・アム・ヒッピー』（山田塊也 2013年 森と出版）から引用

のちの「部族」となる若者たちにコミュニケーションづくりを勧めたのはゲーリー・スナイダーでした。

ゲーリーは、ジャック・ケルアックなど「ビートニク」の仲間であり東洋思想の師匠でしたが、50年代に来日して京都の禅寺で修行をしていました。

1967年ごろまでは日本にいましたので、50年代から「新宿風月堂」を拠点とする「新宿ビートニクス」と呼ばれた若者たちと交流するとともに示唆を与えていたのです。

彼らはまず、自分たちの考えを示すために「部族新聞」を1万部印刷し、新宿などで、手売りですべて売り切り増刷もしています。

それから3か所の「コミュニケーション」をつくるために散るわけですが、自分たちの主張を明確にあらわし、それを印刷し売り切るといふことはすごいことです。

1万部は身内や周りの人たちだけではとても賄いきれる数ではありませんから、彼らの考え方に共感する人たちがそれほど多かったのだと思います。

そして「部族」は、鹿児島・諏訪之瀬島（ガジュマルの夢族）、長野・富士見高原（雷赤烏族）、東京・国分寺（エメラルド色のそよ風族）の3か所で「コミュニケーション」の実験を始めます。

国分寺の「部族」は「エメラルド色のそよ風族」と名乗り（あまりにも時代をあらわす名前ですが当時は本当にかっこよかったようです）、1968年5月に国分寺駅北口から少し離れたところにあるアパートを借り切って、男女30人ほどの都市型コミュニケーションを始めます。

「部族宣言」の中で示されているように、ピラミッド型の組織を否定し、原始共産制的な理想で運営するため、リーダーはいなかったのですが、中心となったのは20代後半で年長者だった**山尾三省**さんや**長本光男**さんたちでした。

「新宿ビートニク」時代からの精神的指導者は、**ゲーリー・スナイダー**と**ナナオサカキ**でした。

ナナオサカキは日本で最初の「ビートニク」とでもいうべき人です。

第2次大戦時には鹿児島のリレー基地で、戦後は出版社で働いていたのですが、あるときに仕事をやめその後は一切働かず放浪の人生を送ります。

日本ではほとんど知られていませんが詩人として欧米では有名な人です。

ナナオは50年代に「新宿風月堂」で出会った、まだ高校2年生だった**長本光男**さんに、ドロップアウトしてお金を持たずに放浪することを勧めます。

お金を持たないということは自分をさらけ出し人の世話にならざるを得ない状況を作り出すわけですから非常に厳しい旅となります。

ナナオは85歳で亡くなるまで、日本だけでなく世界各地でそのような旅を続けた人でした。

「部族」の国分寺での「コミュニオン」がうまくゆかなかったのは、運営があまりにも理想主義的過ぎたからです。

誰でも受け入れ、アルバイトなどで稼いだお金はザルに入れ誰でも必要な分だけ使えるといった性善説そのもののやり方ではうまくゆくはずはありません。

すぐに経済的苦境に陥ることになります。

立て直しのために最初はラーメンの屋台を国分寺駅北口に出して結構儲かっていたようですが、地周りのヤクザに目を付けられできなくなります。

そこで考えたのが、現在ではカフェやスナックと呼ばれるような飲食店をつくることでした。

資金などないので材料を集めてDIYで作るしかありません。

ちなみに、このあと国分寺の喫茶店・カフェはDIYで作られたところ（「**ほんやら洞**」1975年、「**カフェスロー**」2001年、「**Roof**」2004年、「**喫茶ソラクラゲ**」2023年）が多く、もしかしたらまちの伝統ではないかと思うほどです。

「部族」がつくった店「**ほら貝**」は、生活の手段として、また仲間たちの居場所としても重要な場所となりました。

おそらく、「**ほら貝**」は日本で最初のロック喫茶なのではないかと思います。

この当時はロック音楽をかける店がなく、個人でオーディオ機器を持っている人はほとんどいない状況です。

伝手があったのでアメリカから最新のロックのレコード（**ジェファーソン・エアプレイン**、**グレートフル・デッド**など）が届いて、それがかかっている店はロック音楽が好きな若者たちも来るようになり流行っていたようです。

「ほら貝」は数名の元「部族」のメンバーが交代制で運営し、休みを交代で取り、インドやアメリカに長期の放浪の旅に出るといったこともしていました。

国分寺の「部族」（**エメラルドのそよ風族**）の「**コミュニン**」をつくる実験は1970年ごろに終わりました。

「ほら貝」で、交代で働いていた**山尾三省**さんは家族4人でインドに、**長本光男**さんは夫婦でアメリカに、放浪の旅に出かけます。

帰国後、「ほら貝」で、二人で飲んでいたときに、有機野菜の販売をやろうという話になったのです。

アメリカ・**バークレー**でヒッピーたちが有機野菜を販売する店をやっていたのを見て長本さんが強い印象を受けたことがその理由でした。

最初は中古のトラックを使って**けやき台団地**など多摩地区の団地を回っていたのですが、非常に理解のあるビル・オーナーの好意で西荻窪の古いビルを丸ごと安く借りることができたので、有機野菜を売る八百屋「**長本兄弟商会**」（兄弟で営む店ではなくブラザーフッドつながりの店という意味です）を中心とする「**ほびっと村**」ができました。

有機野菜販売店を中心とする、ある意味「**ヒッピー**」たちの理想を現実に落とし込んだ、「**都市型コミュニン**」のショーケースといえる試みでした。



ホビット村（長本兄弟商会）

「ほびっと村」（長本兄弟商会）が誕生して1年後、店の経営が軌道に乗ったところで山尾さんは屋久島に家族で移住し農業を始めます。

山尾さんは最初、相当な苦労をされたようです。

国分寺時代から西荻窪時代までのことは1981年に発表された『聖老人』という山尾さんの最初の本に書かれています。

山尾さんはこのあとも農業の傍ら2001年に亡くなるまでたくさんの詩やエッセイを発表し続けました。

また、長本光男さんも長本兄弟商会を続け、その経緯を『みんな八百屋になーれ』という本に書かれています。

長本さんのところで働き、その後独立して有機野菜を販売する八百屋を始めた元スタッフは多く、国分寺でも80年代前半に「野狐禅」という店があったそうです。

長本さんは2023年に亡くなりましたが、息子さんたちが店は続けています。

「部族」の精神的指導者だったゲーリー・スナイダーはアメリカに帰国し新たな活動を始めますが、1975年には『タートル・アイランド（亀の島）』という詩でピューリッツァー賞を受賞するなど思想や行動が高く評価されてゆきます。

70年代の国分寺

ここからは70年代の国分寺のまちの話に移ります。

70年代の国分寺のまちがどのような様子だったのかは竹中直人さんと村上春樹さんの文章を読むとその一端がわかるのではないのでしょうか。

「国分寺というまちはとても好きなまちだった。国分寺駅南口を降りて左に折れると、いつも後払いで読みたい本をもっていける『民生書房』。その坂をずっと下りていくと、ツケで何杯もコーヒーを飲ませてくれる、美大生のたまり場『寺珈屋』～中略～そんな店がいっぱいあった」（『少々おむずかりのご様子』 竹中直人 1993年）

「つまり金はないけれど就職もしたくないなという人間にも、アイデア次第でなんとか自分で商売を始めることができる時代だったのだ。国分寺の僕の店のまわりにもそういった人たちのやっている楽しい店がいっぱいあった」（『村上朝日堂』 村上春樹 1984年）

1976年に大学進学のために国分寺に住み始めた竹中さんはその時点で20歳、1974年に国分寺で店を始めた村上さんは76年時点では27歳です。

竹中さんの「そんな店」や村上さんの「楽しい店」とはどんな店だったのでしょうか。

その前に 70 年代とはどのような時代だったのかをごく簡単に説明したいと思います。

非常に大まかにとらえると、60 年代後半の熱が急に消えていった時代なのです。

特に、1972 年 2 月の「**あさま山荘事件**」によって、70 年代に入っても残っていた 60 年代的な理想主義的熱気が一気に冷めたような印象を受けます。

事件が終わったあとに明らかになった、仲間たちの集団リンチ殺人事件という、衝撃的で悲惨過ぎる事実によって、このあとは暴力を伴う政治プロテスト活動は、すべて否定されるようになってゆきました（しかし、この後も、74 年の**三菱重工爆破事件**などのテロ事件がありました）。

このころの時代の急激な変化は、歌の歌詞にも表れていて、60 年代末の「**私たち（連帯、朋友など）**」をうたったフォークソング（この時点ではカウンターカルチャーの代表でした）の歌詞が、1972 年以降は「**私（あるいは私と愛する人）**」に急激に変わってゆくのです。

どのように変わったかを知っていただくために、60 年代末の政治的プロテスト行動のなかで集団で歌われた歌と政治の季節が去った直後の歌をさわりだけですが聴いてみましょう。

最初が**岡林信康**『**友よ**』で、続いて**井上陽水**『**帰れない二人**』です。

テレビドラマは 70 年代中ごろにはホームドラマから反ホームドラマに変わります。

それまでのいろいろ波風が立っても家族は支えあうものといった予定調和（1970 年『**ありがとう**』**平岩弓枝**脚本など）から、家族はすでにバラバラであるというリアルな現実を見せるドラマ（1977 年『**岸辺のアルバム**』**山田太一**脚本など）に変わっていったのです。

1973 年には「**石油危機**」がありましたが、日本はうまく乗り切り 80 年代の経済的繁栄の時期を迎えることになります。

欧米では石油危機をきっかけに長い経済不況に陥り新自由主義が出現しています。

「**ポパイ**」という雑誌が創刊された 76 年ごろからは消費文化、カタログ文化の時代に入ってゆきます。

また 70 年代は公害問題が顕在化した時代でもあります。

1972年6月の**国連ストックホルム会議**では医師の**原田正純**さんらが水俣病を訴え、ほぼ同じころに、写真家の**ユージン・スミス**が「**ライフ**」誌に「**ミナマタ**」の写真を発表することで、日本の公害問題は世界で知られるようになります。

朝日新聞に連載されていた**有吉佐和子**『**複合汚染**』が75年にベストセラーとなり、多摩川も野川もドブ川だったころです。

ちなみに、家族の問題が顕在化したのが70年代半ば以降なのではないのでしょうか。

国分寺で起こった「**イエスの箱舟**」事件が、この時代の家族の問題の象徴的事件でしょう。

怪しげな新興宗教の問題だと最初は思われた「**イエスの箱舟**」事件がもたらしたのは、崩壊しているのに体裁を繕っている家族のなかで子ども（特に女子）が居場所を求めて逃げ出し最後にすった場所だったということでした。

このあと、1980年には**神奈川金属バット両親撲殺事件**が川崎で起こり、80年代には**校内暴力**が問題となります。

「ピーターキャット」と村上春樹

村上春樹さんが国分寺でジャズカフェ「**ピーターキャット**」を始めた1974年ごろは、新宿ではすでにジャズ喫茶のブームが去り閉店する店も多くなっていました。

しかし、東京郊外や地方ではまだやっていけたようです。

国分寺には60年代半ばから北口に「**モダン**」というジャズ喫茶があり、ムサビのジャズ研のたまり場でした。

南口の「**ピーターキャット**」は東経大のジャズ研のたまり場となり、ジャズ研の学生たちは村上さんに店に楽器を置いてもらうこともお願いしたそうですが、村上さんは認めてくれたそうです。

村上さんの店の特徴は、小ぎれいで居心地がよく、少し古い優れたジャズがかかり、珍しい食べ物やお酒を出し、隔週日曜日には若手のジャズ・ミュージシャンのライブもありました。

ムサビ、東経大、津田塾などの学生たちの大事な居場所となり、そのなかからアルバイトになる学生もいました。

村上さんは**組織で働く「安定」と引き換えに失われる「自由」を求めた「自己表現」として「ピーターキャット」を経営していたのだ**と思います。

国分寺時代のことをエッセイで何度も書かれていますが、村上さんが店を経営するなかで考えられたことは作家になってからも生かされているのではないのでしょうか。

ここで、村上さんの「**ピーターキャット**」でアルバイトをされていた、当時武蔵野美術大学の学生だった**林盛幸**さんという方がそのころの思い出を書かれているブログ（「**国分寺・国立 70s グラフィティ**」）を見ていただきたいと思います。

林さんのこのブログは、村上さんが経営していた店の様子について知りたいと思う熱心なファンたちが世界中から閲覧しているようです。

村上さんの店の間取り、かけていた曲、村上さんの素顔、周りの店の人たちとの交流などが描かれていますが、「**ピーターキャット**」の最初の方の客になったのは林さんを含むムサビの3人組で、彼らが最初のアルバイトになっていったのです。

ここで林さんもブログに書かれている、「**ピーターキャット**」閉店時に毎日流されていた曲をほんの少しだけ聴いてみたいと思います。

「**スタンリー・タレンティン ウィズ ザ・スリー・サウンズ**」の『**シンズ・アイ・フェル・フォー・ユー**』という曲です。

「ほんやら洞」と中山ラビ

中山ラビさんは東京生まれですが、大学入学後すぐに関西に向かいます。

家出同然だったとのちに言われていました。

関西でフォーク歌手になったあと、1975年にできた国分寺「**ほんやら洞**」の経営を1977年に引き継ぎます。

京都「**ほんやら洞**」をつくる際に手伝っているとはいえ、押し付けられた感のある話でした。

11年間は赤字で歌手としての収入もつぎ込んだそうです。

歌い手としてのラビさんは当時ほかに類例のない表現者でした。

1960年代後半に関西から起こった、日本のカウンターカルチャーだったフォークソングは、男性が中心でしたし、女性で**ボブ・ディラン**の歌詞に深い影響を受け、そこから自分自身の言葉を生み出すような人はほとんどいなかったのです。

ラビさんの言葉は、その身体性も含めて、女性であることを素直に受け止めながらも、女性を様々なかたちで束縛する社会から自由になりたいという思いを強く持つものでした。

おそらく同時代には正確にとらえきれなかったのではないのでしょうか。

90年代に **CHARA** や **UA** といった、ラビさんの世界の延長線上にある女性の表現者たちが出現したことによって、ようやくラビさんの表現の世界が理解されていったのだと思います。ここで、ラビさんの代表曲『**ひらひら**』を少し聴いてみましょう。

国分寺「**ほんやら洞**」には様々な人が集いました。

元ヒッピーだった人たちもです。

しかし、周りの70年代から続く喫茶店が80年代後半から閉店してゆくとラビさんは店を普通の喫茶店から変えます。

ラビさんの友人だった「**劇団青い鳥**」の**木野花**さんのアドバイスによって、夜に酒類を出し、名物となったチキンカレーを出すようになったことが、70年代的な店の雰囲気と思いを残しながらも、バブル経済の時代の変化を乗り切ることになったのではないかと思います。

なお、京都「**ほんやら洞**」については詳しく説明する時間がなく残念ですが、ほんの少しだけ説明させていただくと、日本で最初にアメリカの「**ビートニクス**」たちに影響を受けた詩人たち、ベトナム反戦運動に深く携わった人々、**岡林信康**さんや**中山ラビ**さんたちのようなカウンターカルチャーとしてのフォークシンガーといった人たちの拠点というべき場所でした。

『**ほんやら洞の詩人たち**』という本には、京都「**ほんやら洞**」の詩の朗読会の記録などが記されています。

なお、京都「**ほんやら洞**」は2015年に火災で焼失したため、国分寺「**ほんやら洞**」が4件あったうちの最後の「**ほんやら洞**」となりました。

国分寺の自然

70年代の国分寺は、**村上春樹**さんや**竹中直人**さんが書かれている「**楽しい店**」があった時代でしたが、国分寺の自然を守ろうとする激しい市民運動が起こっていた時代でもありました。



殿ヶ谷戸庭園

国分寺崖線の一部を成している旧岩崎邸をショッピングセンターにするという計画に対する反対運動が起こらなければ、もしかしたら現在の**殿ヶ谷戸庭園**はデパートなどになっていたかもしれません。

反対運動には多くの著名文化人が関わり署名しています（**色川大吉、扇谷正造、串田孫一**などが応援し、**大岡昇平、木下順二、沢村貞子**らが署名しています）。

結果として、旧岩崎邸は東京都が買い取り 8 番目の都立庭園として 1976 年に部分開園することになりました。

「**守る会**」が有料化を望んだのは、例えば**井の頭公園**のように、無料公園とすると環境を維持できないという判断からでした。

このため、有料ゾーンは「**殿ヶ谷戸庭園**」、無料ゾーンは「**殿ヶ谷戸公園**」として整備されたのです。

ちなみに、現在の「**殿ヶ谷戸公園**」の部分が開発計画では名鉄百貨店予定地だったようです。

この経緯については**住吉泰男**さんの労作である『**殿ヶ谷戸庭園－市民が守った多摩の文化財庭園－**』の本に詳しく書かれていますのでぜひお読みください。

「**殿ヶ谷戸庭園**」問題で明らかになったのは、「**殿ヶ谷戸庭園**」を含む「**国分寺崖線**」がまちの発展を妨げるものであるか、あるいは守るべきものであるか、ということでした。

国分寺の自然の持つポテンシャルについても話したいと思います。

国分寺崖線と野川はセットで考えなくてはならないものです。

国分寺崖線は、立川から田園調布まで、古多摩川が蛇行を繰り返しながら気の遠くなるような時間をかけて削り取った河岸段丘の崖です。

国分寺から始まっているからではなく、国分寺付近でその崖の姿が最も明確に観察できるためこの名前がついているようです。

古多摩川が何万年もの間蛇行を繰り返し現在の場所に落ち着いたあとには、取り残された水の流れが小さな川として残りました。



野川

これが野川であり、「**名残川**」と呼ばれる所以です。

このため、例えば石神井川や仙川などは、谷底を流れているためV字型（あるいはU字型）なのですが、野川は左岸が急な崖で右岸が平地であるL字型の珍しい川となっています。

国分寺崖線からは湧水が湧き出て、崖の上の日当たりがよく、川が流れているわけですから、旧石器時代から人が住むようになりました。

国分寺崖線や野川を中心とした多摩の自然とそこに生きる人間の密接な結びつきが初めて描かれた小説が、**大岡昇平『武蔵野夫人』**です。

この小説は悲恋物語、メロドラマですが、主役である人間たちの背景となっているはずの自然が、読後には人間たちを背景とした主役になっているような印象を与える作品です。

長野まゆみ『野川』も同様に、中学生の少年の成長物語というフォーマットのなかで、人間の営みと自然の密接な関係を描く小説ですが、長野さんは、**貝塚爽平『東京の自然史』**を参考資料にあげられていて、国分寺崖線、はげ、野川についてよく調べられています。

貝塚爽平『東京の自然史』は、NHKの人気番組『**ブラタモリ**』のタネ本となっているので、この番組のファンの方ならよくご存じだと思います。

貝塚先生の『**富士山の自然史**』の中では「**野川と国分寺崖線**」が取り上げられているのですが、6ページほどの文章を読むと「**野川と国分寺崖線**」の成り立ちや特徴がよくわかります。

自然と人間の相互の関わりを再度見つめ直すことによって、その土地の特性や自然の持続性を損なわない生活様式を構築していこうという考え方・試みを、「**バイオリージョナリズム（生態地域主義・生命地域主義）**」といい、この考え方は70年代にアメリカで出てきた（提唱者は**ピーター・バーグ**という人です）ものです。

「部族」の指導的役割を果たした**ゲリー・スナイダー**は、自らを「**バイオリージョナリスト**」と名乗り、『**野生の実践**』などのディープ・エコロジーの著作を発表し実践を続けています。

ちなみに、人間の構築物と自然の調和を考え実践されている、ご自宅「**タンポポハウス**」で有名な建築家の**藤森輝信**先生が国分寺（お鷹の道沿い）に移り住まれたのは1976年です。

「三寺」

国分寺は、吉祥寺や高円寺といったまちにくらべると地味だと感じる人は多いようです。70年代中央線サブカルチャーの中心になっていたのは、駅名に同じ「寺」の文字を持つ「**高円寺**」「**吉祥寺**」「**国分寺**」の3つのまちであり、70年代後半以降に「**三寺**」と呼ばれていたということになっています。

しかし、これはメディアがそう名付けただけであまり広がらなかった言い方のようです。確かに、高円寺や吉祥寺のキャラクターははっきりしています。

70年代前半の高円寺には当時、人気爆発したフォークシンガーの**吉田拓郎**さんが住んでいました。

1972年の大ヒット・アルバム『**元気です。**』には『**高円寺**』という歌が入っています。この曲を少しだけ聴いてみましょう。

当時、京都に住む中学生だった**みうらじゅん**さんは、**吉田拓郎**さんの熱狂的ファンで、大学入学のために上京したら高円寺に住もうと考えて本当にそうしています。

翌1973年には、やはり人気フォークシンガーだった**斉藤哲夫**さんが『**吉祥寺**』という曲を発表しています。

この曲も少しだけ聴いてみましょう。

1972年『**高円寺**』、1973年『**吉祥寺**』と続くと、「**三寺**」の順番からすると、1974年には『**国分寺**』という曲が発表されるような気がします。そうはなりません。

この経緯をよく知っていると思われる竹中直人さんは、1996年に『**国分寺 1976**』という曲を発表します。

単に『**国分寺**』と名付けするのではなく、自身が大学入学のために住み始めた1976年をうたの舞台にしたのです。

『**国分寺 1976**』はあまり知られていない曲ですが名曲です。

プロデュースは**高橋幸弘**さんで、作詞作曲は**ザ・ブーム**の**宮沢和史**さんです。

この曲は少しだけ長く聴いてみましょう。

竹中さんの美声のバックで演奏する、高橋幸弘さんのドラムス、**ムーンライダーズ**の駒沢裕城さんのペダルスティール・ギターが素晴らしいです。

『さらば国分寺書店のオババ』が1979年に発表されたことで「**国分寺**」は全国的にメジャーになったような気がします。

このころ私は中学3年生でしたが、朝日新聞の書評欄でこの本が取り上げられていたのを読んでどんな本だろうと思ったことを覚えています。

それから18年後の1997年に国分寺で働くようになったころにはまだ「**国分寺書店**」はあり「**オババ**」（失礼な言い方です！）はいましたが、**椎名誠**さんの描くオババとはまったく違う女性でした。

実は『さらば国分寺書店のオババ』よりも数年前に国分寺が大フューチャーされていた漫画がありました。

水島新司さんの『**野球狂の詩**』です。

架空のプロ野球球団「**東京メッツ**」の本拠地は「**国分寺球場**」で、この場所で非常に濃い群集劇が繰り広げられます。

特に、第38話「**どしゃ降り逆転打**」の回は、国分寺球場特有の風向きの変化などが勝敗を分けるという、日本の漫画で初めて描かれたID野球ではないかと思います。

ちなみに、『**野球狂の詩**』のヒロイン**水原勇氣**は、日本初の女性プロ野球です。

実際に、このあと、1991年に日本野球機構（NPB）は男女平等に合わないとして野球協約を改訂し、「**医学上男子でないものを認めない**」という条項を撤廃しています。

これは『**野球狂の詩**』に描かれたものとまったく同じで、漫画が現実になったわけです。

しかし、女性初のプロ野球選手が認められるまでのこの漫画の中でのヒロインの苦難が酷過ぎると感じられる方が現代ではほとんどだと思います。

偏見や価値観の押し付け、無理解、いじめといったことが描かれるこの漫画ですが、女性が新しい分野にチャレンジするということに対して、半世紀後の現在の日本がどれほど変わったのかというとそれほど変わっていないように感じてしまいます。

70年代にかたちづくられていった国分寺のまちの精神文化とでもいうべきものには3つの特徴があるのではないかと思います。

- ・居心地の良い居場所を創ろうとする（求める）人たちの多さ
- ・「サブカルチャー」「カウンターカルチャー」の風土

・組織を求めない店主への共感（個人店の多さ）

居心地のよい居場所を求める人が多いことがそういった場所をつくろうとする人たちの多さにつながっているのではないかと考えられますし、それは個人店の多さにもつながって現在まで続いているのではないのでしょうか。

喫茶店などの場所はのちに「サブカルチャー」「カウンターカルチャー」と呼ばれることになる文化が生まれて交流するための重要な役割を果たした場所なのではないかと思えます。

なお、現在も、国分寺駅コンコース内にはカフェ・チェーン店が入っていますが、コンコースを出ると、他のまちのようにチェーン店は見当たりません。

国分寺の個人店の強さがわかります。

80～90年代の国分寺

80年代半ば以降は国分寺だけでなく中央線サブカルチャーの中心「三寺」が変化してゆきます。

いわゆるバブル経済の影響が国分寺にも中途半端な形でやってきたのです。

その中で70年代的な国分寺を変えてしまったのは、駅の南北通路開設、駅ビル建設、特別快速電車停車などの1988～1989年（昭和63年から平成元年）の一連の動きです。



国分寺駅南口「かがやき」像

特に国分寺の「南北問題」ともいわれていた連絡通路問題の解消は、南口の70年代的な店の閉店をもたらすものでした。

おそらく40歳以下の方々をご存じないと思いますが、1988年に国分寺駅の南北連絡通路ができる前は、南口にいる人が北口駅前に行くためには、東回りでは殿ヶ谷戸立体の中央線高架を潜り抜けて、西回りでは、花沢橋を渡って行くしかなかったのです。

このため、どうしても急いで北口まで行く必要があるときには入場券を買って狭い跨線橋を渡って行くという方法を選ぶことになります。

この不便さを、国分寺の「**南北問題**」という人たちもいたほどです。

ちなみに国分寺駅ができたのは 1889 年ですが、南口改札ができたのは 1956 年ですので、出口が 2 つになるまで 70 年弱の時間がかかっています。

中央線沿線では国分寺と似たように改札が一つしかなかった駅としては、立川、国立、武蔵境がありますが、3 つの駅は南と北の開発の違いが明確にわかります。

北口にすぐに行けるようになっただけでなく、便利な駅ビルができたことなどによって消費行動は大きく変化します。

特に、若い人たちにとっては、特別快速が停車するようになったことによって 20 分ほどで新宿に行けるようになったことは大きかったと思います。

また、駅ビルは**殿ヶ谷戸庭園**にできるはずだったショッピングセンターが形を変えてできた施設という言い方もできるのかもしれませんが。

中山ラビさんは 70 年代の喫茶店が次々と消えていったと書かれていますが、私が国分寺に来た 1997 年の時点では、70 年代的な店は中央線沿線のほかのまちよりも多く残っていると感じました。

「**寺珈屋、ぶりきかん、たらまんか・・・次々消えた。無機質なカフェが次々に生まれ、色濃いユニークな喫茶店は取り残されていった。バブルだった**」（『多摩ら・び』2014 年国分寺特集号）

国分寺のしぶとさは、80 年代初めにも、1982 年の「**でめてる**」「**珍屋**」など 70 年代的な店ができていることです。

2000 年代以降

20 世紀の終わりに 70 年代的な店が次々と消えていったのですが、21 世紀に入ると新たな展開がありました。

2001 年の「**カフェスロー**」の誕生からそれは始まったのです。

いわゆるバブル景気の時期の価値観の揺り戻しなのでしょうか、2000 年前後から「**スローライフ**」という考え方が出てきて、それに共感する人たちが増えてゆきます。

「**カフェスロー**」は、70 年代後半ごろから現れてきた自然食レストランの流れをくむ店ですが、コンセプトが新鮮でおしゃれだったので、新しい何かが現れたという印象を持つ人が多かったのではないかと思います。



カフェスロー

オーガニックな食品を扱う店はヒッピー文化を源流に持つところが多く、どこか求道的な感じがして入るのをためらうところが多かったのも事実でしたが、「**カフェスロー**」は開かれていて、地に足の着いた新しいタイプのおしゃれな感じを私も受けました。

そして、コンセプトや思想性の確かさと、その打ち出し方の適切さやうまさによって共感する人々が増えていったのです。

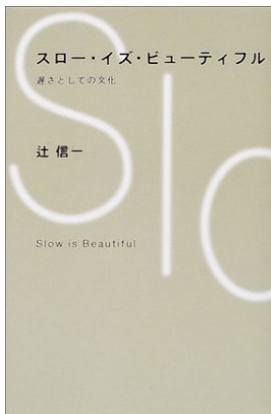
例えば、エネルギーをできるだけ使わないようにしようといった呼びかけも、正しさを前面に出すのではなく、夏至の日にできるだけ灯りを消して自分を見つめなおそう、好きな人と過ごそう、といった提案の仕方をした「**暗闇ナイト**」というイベントが、あっという間に「**100万人のキャンドルナイト**」というイベントに拡大していったことなどが例としてあげられるでしょう。

店のオーナーである吉岡淳さんが2004年に『**カフェがつなぐ地域と世界 カフェスローへようこそ**』という本を発表されると、国分寺は「**カフェスロー**」を中心としたスローライフなまちという紹介の仕方をメディアはするようになってゆきます。

今日のお話しのタイトルである「**国分寺はなぜスローライフなまちといわれるのか**」という問いへの答えは、狭い意味ではこのような説明になります。

「**カフェスロー**」のブレンは明治学院大で人類学を教えられていた**辻信一**さんです。

辻先生が2001年に発表された『**スロー・イズ・ビューティフル**』という本は、「スローライフ」という考え方を理解するためには最も重要な本ではないかと思います。



『スロー・イズ・ビューティフル』（辻信一 2001年）

辻先生は、60年代の理想主義を追い挫折した若者の一人だったようです。

60年代のヒッピー文化や様々なプロテストの行動といったものが、70年代を経てどのように新たな行動や考えになっていったかがこの本には紹介されています。

また、70年代前半には、メインカルチャー、体制側からの問題提起が行われたことも紹介されています。

1972年の『**成長の限界**』では、人口増加や環境汚染の進行によって100年以内に地球上の人類の成長は限界に達することが、おそらく人類初めてのコンピュータ・シミュレーションによってなされています。

また、1973年の『**スモール・イズ・ビューティフル**』では英国石炭公社顧問の立場にあった**シューマッハー**が、巨大になり過ぎた文明の行き詰まりに警鐘を鳴らし、小さいことの必要性を、正しさからではなく、美しさという新たな視点から示しています。

『スロー・イズ・ビューティフル』には「**部族**」の詩が2つ引用されています。

忙しい今日だから

ゆっくり歩く

秋の陽のふりそそぐ音が

きこえますように

山尾三省「ゆっくり歩く」

数字をすて

時計をすて

明日をすて

あきらよ

畑に 星を植えよう

ナナオサカキ「星を植えよう」

「ヒッピー」たちの理想と「スローライフ」はつながっているのです。

2008年からの新たなはじまり

国分寺のまちは2008年から新たな段階に入ります。

6月に「カフェスロー」が東元町に移転、10月には「クルミドコーヒー」が西国分寺に誕生し、翌年に「おたカフェ」となる「おもてなし屋台」が現在のお鷹の道のところで営業されていました。

コーヒーとケーキだけではない、交流や学びの場である「サードプレイス」として、志を持つ「カフェ」が同時多発的に誕生したのです。

それぞれの「カフェ」の試みも面白く深いのですが、2011年の「ぶんぶんウォーク」が契機となり、この3つのカフェが中心になり国分寺のお店同士がつながってゆくのです。

3つの「カフェ」を中心に生まれた「『正解』のない問いについて、自分や他人の声に耳を傾け、言葉を交わし合う場」（クルミドコーヒーの哲学カフェ「朝モヤ」のウェブサイトでの説明文）は現在の国分寺特有の文化となっています。

それは、平日の夜仕事を終えた後や土日の午前中に集まって、前半でテーマについて詳しい人が話をして、休憩後の後半ではグループに分かれて意見を出したりそれをまとめて発表したりするようなかたちで行われるものです。

私の知る限り、中央線沿線のほかのまちで同様のことが毎月のようにどこかで行われているようなところはありません。

国分寺のまちの本当に誇れる文化だと思います。

最後に少しだけまとめたいと思います。

「現在の国分寺のまちに流れる精神」といったものを大づかみに「スローライフ」と呼ぶならば、そのルーツは、ヒッピー文化に代表される60年代の理想主義であり、70年代の環境問題などの問題提起ではないかと思います。

60年代の理想主義が70年代を経てこのまちで生き残ってきたのは、国分寺特有の個性の強い喫茶店・カフェといった重要な「**サードプレイス**」があったからなのではないのでしょうか。

2000年代に入ると、国分寺には新たな場所としての、いわば「**アクティブなサードプレイス**」とでも呼ぶべきカフェが同時多発的にできました。

そのような「**カフェ**」から発信され、共有されてゆく「**話し合う文化**」は、国分寺のまちの現在にとって宝物のように思えます。

「**カフェスロー**」から始まったこの文化は、「**おたカフェ**」の「**水の学校**」や「**クルミドコーヒー**」の「**朝モヤ**」、「**カフェローカル**」の「**ローカルテーブル**」や「**国分寺カレッジ**」などに広がってきています。

「**スローライフ**」とは単なるエコロジーの実践なのではありません。

60年代の理想主義と70年代の問題提起を源流とするということは、言い方を変えるならば、「**現状に問題意識を持つ人々によるオルタナティブな生き方の実践**」なのではないかと思えます。

また、それは人や環境に対しての「**つながり直し**」であり「**住み直し**」といったことでもあります。

「**スローライフ**」＝「**つながり直し**」と「**住み直し**」は、これからどうなってゆくのでしょうか？

まずは21世紀になってから国分寺のまちで生まれ育った「**話し合う文化**」のおもしろさや深さに気づく方々が増えてほしいと思えます。

そうでなければ「**話し合う文化**」はすぐに衰退してしまうからです。

そのための場である、「**話し合う**」イベントには多くの方に参加してもらいたいと思えます。「**話し合う場**」をつくらうとする人ももっと増えてほしいと思えます。

また、この場のように、過去から学ぶ人や学ぶ場も増えてほしいと思えます。現在や未来に向き合うためには過去に学ぶことも必要です。

ここまで国分寺のまちに流れている精神文化とでもいうべきものを「**スローライフ**」を中心に長々と話してきました。

「**スローライフ**」とはどのようなものなのか、どこからきたのか、といったことについてなんとなく理解していただけたのではないかと思います。

様々なものを取り込んで話をしてきたので、部分的には説明不足だったかもしれません。途中で音楽もかけましたので。

ここでいったん話を終え、7分間の休憩後にご質問を受けたいと思えます。

また、説明不足のところなどありましたらご指摘いただければ補足説明をいたします。

最後に、お配りしたプレイリストの最後にある、**RCサクセション『ヒッピーに捧ぐ』**を聴きながら休憩に入りたいと思います。

ここまでのご清聴ありがとうございました。

以上